

今週の為替相場見通し(2020年1月14日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.65 ~ 109.69	109.50	108.80 ~ 110.80
ユーロ	(ドル)		1.1086 ~ 1.1205	1.1121	1.1000 ~ 1.1250
(1ユーロ=)	(円)		120.17 ~ 121.83	121.78	121.00 ~ 123.00
英ポンド	(ドル)		1.3014 ~ 1.3210	1.3073	1.2900 ~ 1.3150
(1英ポンド=)	(円)	*	140.85 ~ 143.50	143.04	141.00 ~ 144.00
豪ドル	(ドル)		0.6849 ~ 0.6957	0.6899	0.6850 ~ 0.6970
(1豪ドル=)	(円)	*	73.76 ~ 75.70	75.54	75.00 ~ 76.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1)今週の予想レンジ: 108.80 ~ 110.80 円

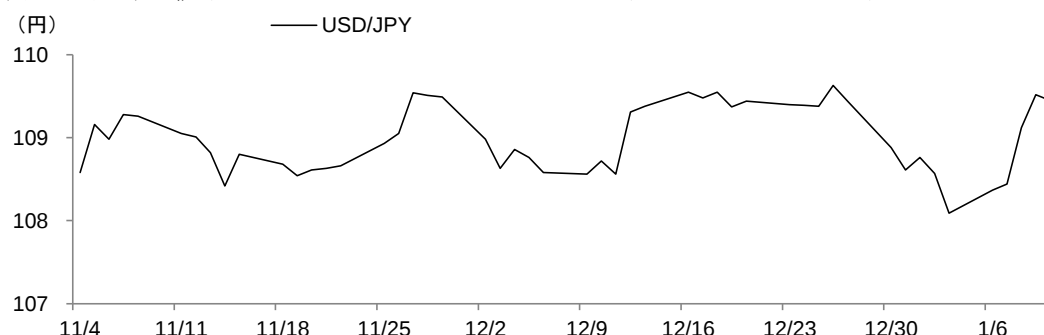
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場はドル高の展開。週初6日は108円ちょうどでオープンしたドル/円は、米国とイランの対立が嫌気され、上値重く推移したが、米10年債利回りが1.8%台へ戻し、軟調な米株式相場にも勢いが戻る中一時108円台半ばまで買われた。翌7日は、イランが米国に報復を検討しているとの報道を受け、108円台前半まで下落。その後、米12月ISM非製造業景況指数が市場予想を上回る結果となり、108円台後半まで上昇した。8日はイランが米軍駐在のイラク基地にミサイルを発射したとの報道を受け一時週安値の107.65円まで下落。しかしその後は日本株の反発を横目に、108円台を回復。その後はイラン高官による戦争は求めているとの発言やトランプ米大統領による軍事力行使しないとの発言から地政学リスクは後退し、109円台前半まで上昇した。9日は、中東情勢の緊張緩和の拡がりに伴って日本株が堅調に推移する中、ドル/円は109円台前半で底堅い推移となった。海外時間には米金利が上昇する中ドル/円は109円後半まで上昇した。10日は前日の流れを引き継ぎ底堅く推移し、一時週高値である109.69円まで上昇。しかしその後発表された米12月雇用統計が市場予想を下回ったことで、109円台半ばで越週した。

今週のドル/円は底堅い推移を予想する。中東情勢の緊迫化が回避されたことにより、目先はリスク選好的なムードが拡がりやすい。また、中国の劉鶴副首相が1月13日からワシントンを訪れており、米中通商協議第一段階の合意署名が予定されていることから、円売りは継続され则认为。ただし、心理的節目である110円を大きく上抜けし、更なるドル買い円売りとなるには材料不足であると思われる。また、米中合意内容の詳細は今後発表させることもあり、下値への警戒は引き続き必要であるとする。米国とイランの関係についても、一旦沈静化しているものの、不透明感是完全に払しょくされておらず、今後の展開には引き続き注目が集まろう。重要指標の発表は14日(火)に米12月消費者物価指数、15日(水)に米12月卸売物価指数、16日(木)に米12月小売売上高、17日(金)に米12月住宅着工件数、米12月建設許可件数の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/6~1/10)の値動き: 安値 107.65 円 高値 109.69 円 終値 109.50 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 松本 奈保輝

(1) 今週の予想レンジ: 1.1000 ~ 1.1250 121.00 ~ 123.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルはユーロ高の展開となった。週初6日は1.1160付近で取引を開始したユーロ/ドルは海外市場でドル売りが強まり、1.12台に乗せる場面はあったがその後は1.12付近で推移。7日は米国とイランの緊張激化が意識され、ドル売りの展開。ただし1.12台をつけるとドル買いの流れ。加えて、米12月ISM製造業景況景気指数が、市場予想を上回ると、一時1.11前半まで下落した。8日は米軍が駐留するイラク空軍基地にイランがミサイルを発射したとの報道を受け、ドル売りが進行し、1.11台後半に上昇する場面があったが、トランプ大統領がイランへの追加制裁を発動を表明しつつも軍事的な反撃に言及しなかったことで地政学リスクが後退、ドルが買い戻される動きに、1.11付近まで下落した。9日は米金利上昇を受けたドル買いに1.11ちょうどを下抜けする場面はあったものの、やや売られすぎ感も意識され、1.11台に戻すと、その後は翌日に米12月雇用統計の発表を控えていることもあり、調整中心の値動きとなり、1.11付近での推移。10日は米12月雇用統計の発表直前には、上振れ期待からドル買いが優勢となり、ユーロドルは一時週安値となる1.1086まで値を下げた場面があったものの、雇用統計の結果が市場予想比弱含んだため、米株下落、米金利低下を背景にドル売り優勢となり、1.11台まで戻すとその後はレンジ推移となり1.11台前半で越週した。6日120.50円付近で取引を開始したユーロ/円は米国とイランの緊張激化を背景にリスクオフの地合となり8日には一時週安値120.17円まで下落。その後は米国とイランの緊張緩和が意識され、10日には週高値121.83円まで上昇した後、121.78円で越週した。

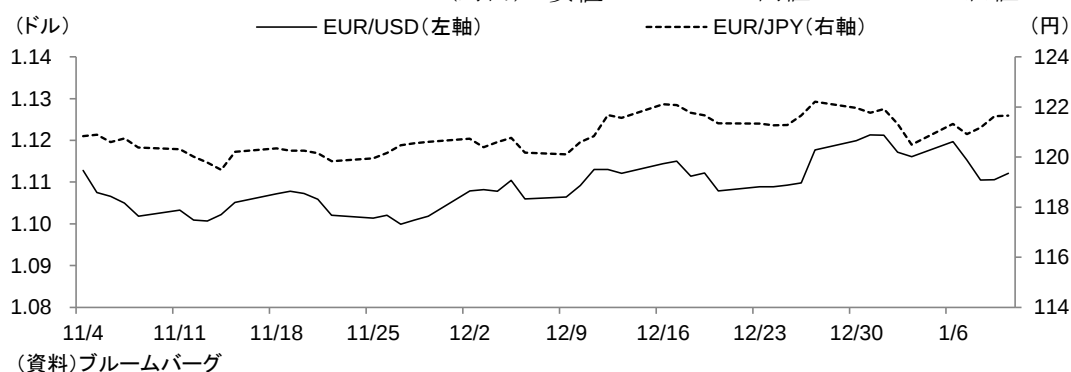
今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想。ドルの底堅さが目立つ中、中東情勢や米国を中心とする貿易協議を受けたドル相場の動向にユーロが影響を受ける展開を予想。ユーロ固有の材料として欧州の景況感に持ち直しが見られることが挙げられるが、ECBの金融政策が大きく変化する公算は小さく、金利面からもユーロの上昇は限定的となりそう。また英国のEU離脱期限を今月31日に控え、離脱に向けた不透明感が継続することもユーロの重し。尚、今週はEUと米国が貿易関連の交渉をする可能性もあり、EUと米国政府のEU製品に対する関税発動を見直しが難航を示せばこちらもユーロの重しとなりそう。重要指標、イベントとしては15日(水)にユーロ圏11月鉱工業生産/貿易収支、16日(木)ECB政策理事会議事要旨(12月開催分)、独12月CPI(確報)、17日(金)ラガルドECB総裁講演、ユーロ圏12月CPI(確報)の発表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/6~1/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1086 高値 1.1205 終値 1.1121

(対円) 安値 120.17 高値 121.83 終値 121.78



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3150 141.00 ~ 144.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、狭い値幅に膠着。週明け6日、ポンドは全面高に振れたが、これは同日発表された英12月サービス業PMI確報値が、速報値の49.1から50.0に上方改訂されたのを好感した値動きと考えられた。小幅ではあったものの全面高に振れたポンドだったが、その後の推移は対ドルで軟調、対ユーロ、対円では堅調と分かれた。主要通貨市場がドル全面高を大枠とする中で、ポンドが一番下げ渋ったと受け止めることもできただろう。ドル全面高の要因としては米株の続伸、米各種株価指数の史上最高値更新を挙げることができただろう。例外的な値動きとして、まず、アジア時間の8日早朝、円が全面急騰/全面急反落する局面が見られた。この乱高下は、イランによるイラク国内の米軍基地に対するミサイル攻撃=地政学的リスクの高まりをきっかけとした。最終的に、同攻撃によって人的被害は発生せず、すぐさま報復攻撃の連鎖につながらないことが確認されたが、円が僅か数時間で急反落したのは、こうした認識が早々に市場に共有されたということであろう。もうひとつの例外的な値動きはポンド全面安で、9日の英中銀カーニー総裁の発言をきっかけとした。同総裁は、英景気の低迷が続くようなら、利下げ、資産購入再開、フォワードガイダンス更新などの金融緩和に踏み切る用意があると述べた。この局面のポンド安が長続きしなかったのも、3月に任期切れを迎える同総裁の金融緩和示唆を、市場が早々に軽んじた結果と考えられた。翌10日にも、同中銀金融政策委員会テンレロイ委員が利下げに積極的な発言をしたが、ポンドはほとんど材料視しなかった。

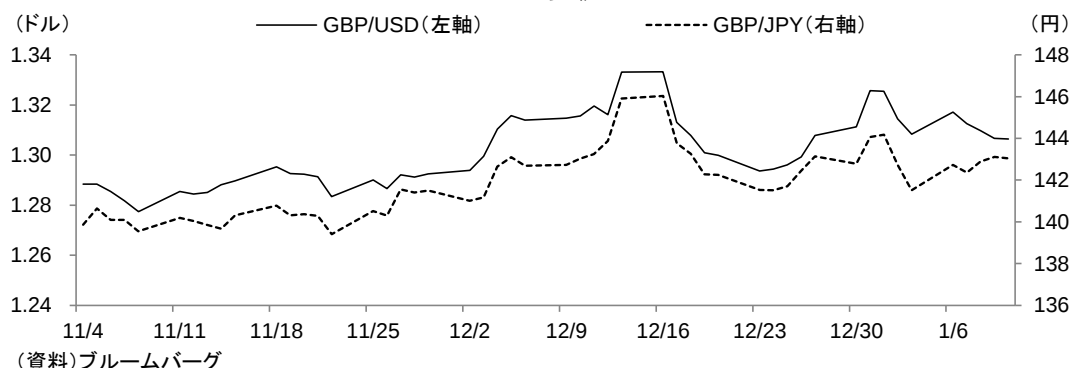
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を予想。膠着を見込むのは、足下の相場展開に困惑を覚えるから。市場の過半が同じ困惑を共有しているとの前提で、目先、なんらかの方向感を見出すのは難しいと考える。年明け以降、主要通貨市場になんらかの方向感が存在するのだとしたら、それはドル高ということになる。まず、この間のドル高を招いたと見られる米株堅調に違和感が拭えない。敢えて言い訳を探すなら、米株堅調の背景は「安心感」ということになる。その安心感の源泉は「米中貿易交渉が第1段階の合意にこぎつける」「米とイランの軍事的報復合戦が回避された」などといった思惑。あくまでも、恐れられていた最悪の事態が回避されただけで、株を売る材料にはならないかもしれないが、連日のように史上最高値を切り上げるほどの買い材料とも思えない。一方で、3月に退任する英中銀カーニー総裁が、「全部で250bp相当の利下げ余地がある」などと言い出したことにも困惑せずにいられない。確かに、①英物価は低下基調を続けており、誘導目標水準(+2%)を明確に割り込んでいる ②GDP、小売売上高、鉱工業生産などの英主要経済指標は軒並み景気低迷を示している ③英中銀金融政策委員会の9委員のうち、既に2委員が利下げに票を投じている ④EU離脱にむけた移行期間が20年末までと区切られた中、自由貿易交渉などの成立が危ぶまれているなど、金融緩和に踏み切るお膳立ては揃っているのかもしれない。しかし、「月600億ポンドの資産購入は基準金利の100bp引き下げに相当する」などという論を耳にすると、その数字にどれだけの裏付けがあるのか疑念を抱かずにいられない。これで今月末の英中銀金融政策委員会、四半期金融政策報告書発表は一段と注目を集めることになるが、今週13日(月)の英11月製造業/鉱工業生産、15日(水)の英12月CPI、17日(金)の英12月小売売上高などにも、従来以上の関心が払われることになる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/6~1/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3014 高値 1.3210 終値 1.3073

(対円) 安値 140.85 高値 143.50 終値 143.04



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6850 ~ 0.6970 75.00 ~ 76.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪6日(月)豪ドルは0.6940を挟んでもみあい。中東情勢の緊迫を受けてリスクオフの動きから豪ドルは小安く取引開始するも、その後は情勢の変化を見極める構えで方向感に乏しい動きとなった。7日(火)、0.6940近辺からスタートした豪ドルはドルの買い戻しと共に下落し、NY時間午後には0.6860近辺まで下落。豪ドル/円は1日を通し、75.25近辺から74.50近辺まで下落。中東情勢緊迫化に加え、米ISM非製造業総合景況指数が市場予想を上回ったことで米金利、ドルが上昇。イランと米国の対立に関しては今後の中東原油供給の途絶の可能性を悲観し、原油先物相場は下落。金先物への逃避需要が高まった。8日(水)は0.68半ばで揉み合い。米軍が駐留するイラク基地にイランが攻撃し、原油相場が急上昇、米株先物は大幅下落。豪ドル売りが散見されるも0.6850近辺では買いが入り、底堅い値動きに。その後全面的な戦争は依然として回避されるとの見方から、リスクオフの動きに巻き戻しが入り、豪ドル/円も序盤の下げから切り替えた。9日(木)豪ドルは1日を通し0.6850を安値とした約30pipsのナローレンジでの取引となった。豪州11月の貿易収支が58億豪ドルの黒字(vs予想 41億豪ドルの黒字)と予想を上回り、豪ドル買い。その1時間後に発表の中国12月PPI、CPIが各予想を下回るも、前回水準よりは悪化していないことが確認されると豪ドルは更に上昇。ロンドン・NY時間は米雇用統計を控え調整ムードの中、米主要株価指数が最高値を更新し、イランとの対立も和らいだことで全般的にドル買いが優勢となった。相対的に豪ドルは下落。9日期日の豪ドルオプションも0.6840に1.9bio程あり、豪ドル上値は0.6880近辺までに抑えられた形となった。10日(金)は豪11月小売売上高が予想外の0.9%と2年ぶりの高水準となり、豪ドルは0.68半ばから0.6870近辺まで上昇。米雇用統計は前値が下方修正され、発射台がやや低くなったものの予想値の160Kには届かず。また失業率は低水準を維持したものの平均時給の伸びは鈍化。数字後は米株とともにドルは下落。いささかFRBの金融政策姿勢を緩和的に傾けそうな内容となった。豪ドルはその裏で支えられ0.69台のせ。

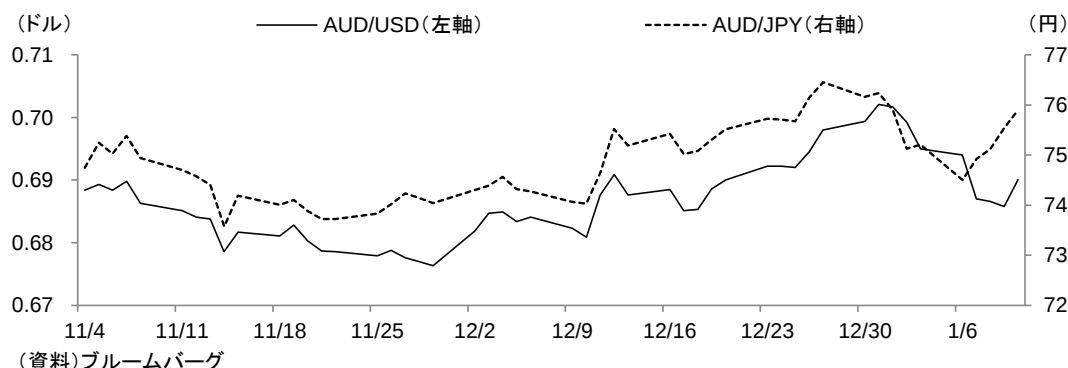
今週は14日(火)期日の豪ドルオプションが0.6905に1.5bio程あり、0.6900近辺での粘度の高い展開を予想するが、一週間を通しては特段注視する豪単体での指標やスピーチは見当たらず方向感に乏しいと感じる。14日(火)発表の中国貿易収支は12月中国輸入(前年比)9.6%という力強い数字が予想されており、また17日の12月中国鉱工業生産や4Q中国GDPにも注目したい。但しここで若干の悪化を見せたとしても、15日(水)に発表予定の米と中国との通商交渉合意の詳細がポジティブなものとなれば豪ドルは0.69半ばまでたどり着ける余力はあるとみる。今後の2国の取り組みについて注視し方向感を見極めたい。リスクオフの流れになれば逃避需要後退で円売りもある程度予想され、豪ドル/円でも76円台へ戻ることも可能とみる。この他の米イベントでは、15、16日と連日ややタカ派に偏りのある(ダラス連銀総裁Kaplan氏を除く)連銀総裁のスピーチが予定されているが、この裏で豪ドルが0.69台をキープできるかが焦点となろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/6~1/10)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6849 高値 0.6957 終値 0.6899

(対円) 安値 73.76 高値 75.70 終値 75.54



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。